

高等専門学校

50_{年の}
歩み

高等専門学校五十年史 2012

独立行政法人国立高等専門学校機構
全国公立高等専門学校協会
日本私立高等専門学校協会

高等専門学校

50_{年の}

歩み

高等専門学校五十年史 2012

私たちの



【明石】上：昭和 37 年、工事中の本校舎
下：正門から現在の校舎を望む



【富山・本郷キャンパス】上空から見た校舎



【新居浜】春、桜並木を歩く学生たち



【岐阜】4月、新入生を迎える満開のしだれ桜



【鹿児島】改修工事を終えたばかりの正門から



【群馬】学校敷地内にある西湖（正観寺沼）は市民の憩いの場



【北九州】南国の情緒あふれる正門付近

学び舎



【香川・詫間キャンパス】学生たちの登下校を見守る石碑



【奈良】「飛行機のある学校」として市民からも親しまれている



上【松江】アメニティ&コミュニケーションの空間「学びの庭（アーケード）」
左【弓削商船】救命艇やカッターなどを収容する実習船係留場



上【木更津】創設後の宅地造成により学校周辺は住宅街に
左【福井】上：昭和44年の空撮
下：40数年後の平成22年校舎改修後に撮影



上【仙台・広瀬キャンパス】雪化粧したキャンパス
左【久留米】イチョウ並木がまぶしいメインストリート

※【 】内は高専名です。

キャンパス



【鳥羽商船】練習船「鳥羽丸」で初めて実習に臨む一年生



【新居浜】平成 24 年度文部科学大臣表彰若手科学賞を受賞した高見静香准教授の授業



【金沢】グローバル情報工学科・英語で専門を学ぶ「工学・英語共同学習」



【東京】実習工場では溶接を学ぶ機械工学科の学生たち



【熊本・八代キャンパス】フライス盤を使用した実習



左【北九州】卒業研究におけるガソリンエンジンのオーバーホールの様子
左下【高知】アメリカ出身のデービッド・グラント准教授による英語の授業
下【久留米】生物工学実験を行う女子学生



【広島商船】練習船「広島丸」の船内で海図を使った船位を測定する実習

ライフ



【釧路】 冬季校内体育大会で行われた「雪上騎馬戦」



【鶴岡】 校内体育大会における「ミニ駅伝」



【一関】 高専祭にて水泳部による男子シンクロのパフォーマンス



【阿南】 学生寮の食堂風景。400名超の寮生のうち50～60名は女子学生



【呉】 文化行事「仲道郁代ピアノリサイタル」にて



【有明】 体育祭・学科対抗の応援合戦。女子学生の演舞は目玉の出し物のひとつ



【岐阜】 年に一度のメインイベント、吹奏楽部の定期演奏会



上【苫小牧】 茶道部による七夕茶会は毎年の恒例行事

右【富山・射水キャンパス】 商船学科卒業式にて伝統の別れのパフォーマンス





高専体育大会

上【近畿大学】平成 22 年度野球競技で優勝
 右【仙台・名取キャンパス】平成 22 年度ラグビー競技で優勝に歓喜する選手たち



上【八戸】平成 23 年度ソフトテニス競技東北地区大会で優勝し 4 連覇達成
 左：平成 21 年度水泳競技女子 400m リレーのスタート



上【高知】平成 23 年度剣道競技で団体・個人優勝およびベスト 4 独占の快挙
 右【鹿児島】平成 23 年度サッカー競技で全国制覇

各種コンテスト



【サレジオ】平成20年度デザインコンペティションものづくり部門最優秀賞「Town's Heart」



【香川・高松キャンパス】平成23年度プログラミングコンテスト課題部門で最優秀賞を受賞



【大分】平成22年度英語プレゼンテーションコンテストのプレゼンテーション部門で念願の優勝



【東京都立産業技術・荒川キャンパス】平成15年度ロボットコンテストで準優勝し「ロボコン大賞」を受賞



【松江】平成16年度ロボットコンテストで優勝した「それいけアルゴン」



【舞鶴】平成22年度ロボットコンテスト近畿地区大会の様子



【長岡】平成23年度国際理解教育プレゼンテーションコンテスト・高校生部門で最優秀賞を受賞



【東京都立産業技術・品川キャンパス】ロボカップ2009世界大会のジュニアレスキュー部門でドイツとスーパーチームを組み、2年連続の世界チャンピオンに

地域への参加・



【石川】キャラバンカー「サイエンシャ」は小中学校や公民館へのお出前授業で大活躍



【仙台・広瀬キャンパス】研究室で議論するフィンランドからのインターンシップ研修生と専攻科の学生



【和歌山】海岸の清掃を行うボランティアサークル「アメーバ」のメンバー



【秋田】ベトナム重化学工業発展のための国際協力機構（JICA）の人材育成研修に協力



【豊田】産学官連携の共同（COOP）教育プログラム「ものづくり一気通観エンジニアの養成」で研究開発に取り組む受講生たち



【小山】近隣の保育園児たちがロボコンに出場した「スーパーザウルス君」と交流



【米子】ロシア・ウラジオストクの極東連邦大学にある平和記念像の上に木造屋根を建設した建築学科の学生たち

国際交流など



【大分】タイ・チェンマイで足踏みミシンの修理をした学生と村人たち



【茨城】地元をPRするためのたこ型ロボット「あ太郎君」を「科学の祭典ひたちなか大会」に出展



【阿南】地元企業・中道鉄工(株)における共同(COOP)教育プログラムで実習する学生



【大島商船】公開講座「身近なものから化学を楽しもう」で市民と共に



【函館】公開講座「微生物たちの世界を見てみよう」で小学生と川の生物を採取



【鶴岡】「鶴岡高専寮生クリーン作戦」で寮生と地元町内会が合同で行う清掃作業



【宇部】地元の農業祭に出展したブースでエコ袋を作成する学生と市民たち



【神戸市立】外務省のJENESYSプログラムに基づくインドネシア理系高校生との交流

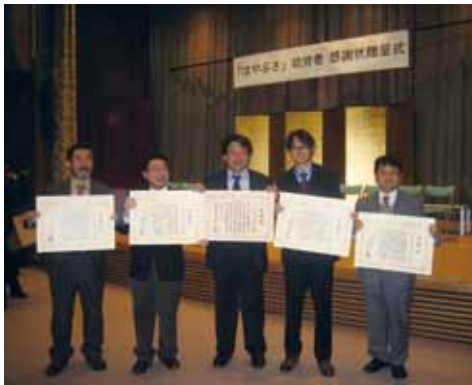
この10年の



平成 16 年 4 月：55 番目の国立高専、沖縄高専の開校・入学式



平成 16 年 10 月：中越地震が発生した 23 日午後 5 時 56 分で止まった長岡高専の時計



平成 22 年 12 月：文部科学大臣感謝状を贈られた、小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェク
トに携わった福島高専の元准教授ら



平成 22 年 9 月：沼津高専の寄附研究部門「水素利
活用技術研究部門（日幸製作所）」の開所式



平成 23 年 2 月：1 月末に新燃岳が噴火。火山灰
除去作業を行う都城高専の学生や教職員

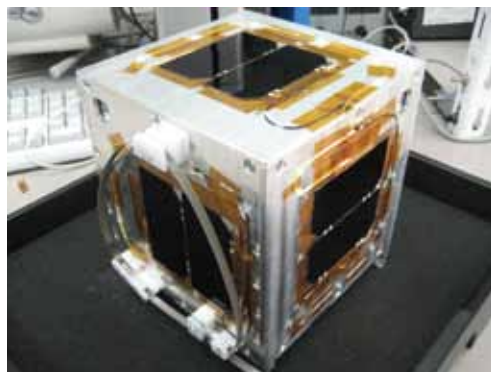
平成 23 年 3 月：東日
本大震災で被災した
仙台高専・名取キャン
パス（左）と福島高専



出来事



平成 18 年 5 月：国立高等専門学校機構本部棟竣工記念式典でのテープカットの様子



平成 21 年 1 月：種子島宇宙センターから打ち上げられた衛星「輝汐」は東京都立産業技術高専・荒川キャンパスの宇宙研究同好会が製作



平成 21 年 10 月：熊本高専再編統合に伴う八代キャンパスの銘板除幕式



平成 21 年 6 月：長野高専の寄附研究部門「制御システム開発研究部門（ミマキエンジニアリング）」の調印式



上 平成 24 年 4 月：文部科学省大学推進事業「質の高い大学教育プログラム」に採択され、設置された鈴鹿高専の風力発電機
右 平成 24 年 5 月：佐世保高専の地域共同テクノセンター開所記念式



高専制度創設50周年記念事業共通マーク

高専制度創設 50 周年記念事業の一環として「高専制度創設 50 周年記念事業」共通マークデザインを募集しました。計 242 点にもおよぶ応募作品のなかから選ばれた、ロゴマークとマスコットキャラクターを紹介します。

ロゴマーク



【最優秀賞】

作：三田 功 さん

周囲の 57 の楕円は全国の高専 57 校を表し、その中心にこれまでの歩みを一繋ぎの 50 を模した矢印で表し、50 周年の節目を超えた先へと伸びた先端が、「進化する高専」を表現しています。背面で 50 を繋げた部分は先人達の築き上げた大きな実績と、学生達のこれから広がる可能性、これらを強く光の当たるフィールドに見立て奥行きのある表現にしています。

マスコットキャラクター



愛称：ココくん

【学生優秀賞】

作：会沢 渚織 さん（福島高専専攻科 元学生）

「進化する高専」をテーマに、次世代へと生まれ変わるロボットをイメージしています。

レトロで機械的なロボットの中から、近代的でより私たち人間に近い、親しみやすいロボットが顔をのぞかせていて、この後、高専はどんな飛躍を遂げ、新しい顔をのぞかせるのか、次世代への進歩をそれとなく期待させるキャラクターにしています。

目 次

「高等専門学校 50 年の歩み」発行にあたって	1
高等専門学校制度創設 50 周年を迎えて	
小畑 秀文 (独立行政法人国立高等専門学校機構 理事長)	5
荒金 善裕 (全国公立高等専門学校協会 会長)	6
神野 稔 (日本私立高等専門学校協会 会長)	7
赤坂 裕 (一般社団法人全国高等専門学校連合会 会長)	8
高等専門学校制度創設 50 周年に寄せて	
田中 眞紀子 (文部科学大臣)	11
野上 智行 (独立行政法人大学評価・学位授与機構 機構長)	12
木村 孟 (一般社団法人日本技術者教育認定機構 会長)	13
新原 皓一 (国立大学法人長岡技術科学大学 学長)	14
榊 佳之 (国立大学法人豊橋技術科学大学 学長)	15
米倉 弘昌 (一般社団法人日本経済団体連合会 会長)	16
長谷川 閑史 (公益社団法人経済同友会 代表幹事)	16
岡村 正 (日本商工会議所 会頭)	17
鶴田 欣也 (全国中小企業団体中央会 会長)	17
芦田 昭充 (一般社団法人日本船主協会 会長)	18
三町 章 (全日本中学校長会 会長)	18
四ツ柳 隆夫 (高等専門学校連合会 元会長)	19
林 勇二郎 (独立行政法人国立高等専門学校機構 前理事長、特別顧問)	19
H.E. Datuk Shaharuddin Md. Som (在日本マレーシア大使館 大使)	20
Dr. Kitti Tirasesth (タイ・キングモンクット工科大学ラカバン校)	21
Mr. BOO KHENG HUA (シンガポール・テマセク ポリテクニク)	21
Ir. Dr. Lawrence W Chan (香港職業訓練協議会)	22
Dr. Lung-Sheng Lee (台湾国立聯合大学)	23
I 高等専門学校の創設から 50 年の歩み	
1. 高専制度創設の経緯	27
2. 学校設置等の変遷	30
3. 主な制度改正・審議会答申	33
4. 高専の特色ある活動・行事	40
5. 公立高専 50 年の歩み	47
6. 私立高専 50 年の歩み	51

II 高等専門学校教育における近年の動き	
1. 高専教育の充実に向けた近年の動き	59
2. 国立高専の動向	62
3. 公立高専の動向	84
4. 私立高専の動向	85
5. 国公私立高専連合会の活動	86
III 参考資料（中央教育審議会答中等）	
1. 高等専門学校教育の充実について	97
2. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について	100
3. OECD 高等教育政策レビュー我が国の高等教育政策に関する報告（概要）	102
IV 高等専門学校制度略年表	105
V 付属資料	
1. 歴代校長一覧	111
2. 教職員数一覧	117
3. 学校別学科設置状況等変遷一覧	118
4. 本科入学志願者・入学定員・入学者および学生総数等の推移	132
5. 本科卒業者・専攻科修了者の年度別進路状況	133
6. 学校別大学編入学者数	134
7. 卒業者の大学編入学状況	136
8. 本科卒業者の産業別就職者数	141
9. 専攻科修了者の大学院進学状況	142
10. 学生寄宿舍の入寮者数	144
11. 国際交流（国立高専の留学生受入れ）の状況	145
12. 産学連携の状況（国立高専）	147
13. 全国高専体育大会年次別団体成績一覧	149
14. 各種コンテスト成績一覧	150
15. 高専分布図	153
執筆者一覧	154
編集後記	155



「高等専門学校 50 年の歩み」 の発行にあたって

高等専門学校制度創設 50 周年記念事業実行委員会
委員長 京兼 純
独立行政法人 国立高等専門学校機構 理事
明石工業高等専門学校 校長

高等専門学校（以下、高専）制度が創設されて、平成 24 年度は 50 周年を迎えることとなり、これを契機として高専教育の原点を再認識し、これからの 50 年にむけた人材養成を展望するために記念誌（高等専門学校五十年史）を刊行しました。今回は、独立行政法人国立高等専門学校機構、全国公立高等専門学校協会と日本私立高等専門学校協会の三者が初めて連携し、高等専門学校制度創設 50 周年記念事業実行委員会のもとで編纂作業を進めてまいりました。

今般の記念誌発行にあたりましては、文部科学省を始めとする諸機関、産業界、関係各位のご支援・ご協力、ならびに設立時からの歴代校長および教職員、各分野で活躍している 30 万人強の卒業生のご尽力とご苦勞に対し、深甚な謝意と敬意を表します。


本誌では、「Ⅰ 高等専門学校の創設から 50 年の歩み」で高専制度発足から、社会状況や産業構造の変化に対する教育改革と改善、高専卒業生を対象とした長岡・豊橋技術科学大学の創設、平成 3 年の中央教育審議会(中教審) 答申「高等専門学校教育の改善について」を受けての専攻科の設置、国際交流事業、各種コンテストやスポーツ大会などの諸事業の変遷、平成 16 年の高等教育機関全般にわたる組織改革にともなう法人化移行まで、50 年を概観しています。「Ⅱ 高等専門学校教育における近年の動き」は、法人化をはさんでの直近 10 年間の取組にスポットを当てた構成としております。

高専制度創設 50 周年を区切りとして、57 高専が「進化する高専」をキーワードに社会の要請に応え、持続的に発展していくためには、平成 20 年の中教審答申「高等専門学校教育の充実について」を念頭にいれつつ果敢に推進することが必要かつ重要であり、使命だと思っています。


最後になりますが本誌を手にした皆様、是非これからも高専のよき理解者として広く応援をしていただき、育ててくだされば幸に存じます。

平成 24 年 10 月 30 日

※本誌では、「高等専門学校」を「高専」と表記します。



高等専門学校制度
創設50周年を迎えて





高専の更なる飛躍に向けて

独立行政法人 国立高等専門学校機構

理事長 小畑 秀文

昭和 37 年に 12 の国立高等専門学校（高専）が創設されて今年には 50 周年にあたります。高専は、日本の高度経済成長を担うべく、産業界からの強い要望に基づいて実践的で高度な専門知識を持つ技術者の養成を目的として設立されました。今日までの高専の 50 年の歴史を振り返ると、日本の高度経済成長と歩調を合わせるように量と質ともに目を見張るほどの発展を遂げています。平成 14 年 10 月に設置された沖縄工業高等専門学校は 55 校目となります。これら 55 校は、平成 16 年の法人化により、独立行政法人国立高等専門学校機構の下に一つの高等教育機関として集約されました。また、修業年限 5 年の本科で修得した基礎の上に特定の専門領域におけるより高度な知識・素養を身につけ、高い課題設定・解決能力を養うことにより複合領域にも対応できる創造的技術者の育成を目的とした専攻科も全高専に設置されています。いまや 5 万人余の学生と約 6,300 人の教職員を擁し、日本全体をカバーする一つの大きな“高等教育機関”です。

高専では、5 年一貫のゆとりある教育環境の中で、座学に加えて実験・実習・実技によってものづくり学問を実質化させ、海外を含むインターンシップ等の体験的な学習により実践力を習得させるきめ細かな教育が行われています。また、高専特有の重要な教育プログラムと位置付けられるロボットコンテストやプログラミングコンテスト、デザインコンペティションあるいは英語プレゼンテーションコンテストは、発想の柔軟性と創造力、さらには主体性と豊かな国際感覚を持つ技術者育成に極めて大きな効果を発揮しています。これらに加え、恵まれた施設の下での活発な課外活動や学生寮での集団生活を経験することにより、豊かな教養と人間性に富み、創造力のある技術者が育てられます。これこそ高専教育の真髄です。高専はその使命である「創造性のある実践的技術者の育成」を通して我が国のものづくり基盤の確立に大きな役割を担って来たと自負しています。幸いにも、高専が果たしてきた役割については、各界から極めて高い評価をいただいています。これも高専発足以来の 50 年の歴史の中での教職員の努力と、卒業生の社会での活躍の結果であり、また産官学の各界からの強力なご支援の賜物です。高専創設 50 周年の節目にあたり、ここに改めて関係の皆様に対して心よりお礼を申し上げます。

我々を取り巻く環境は日々動き、急速に変化していますが、創造的・実践的技術者の育成を担う高専の役割は益々重要性を増しつつあります。高専創設 50 周年を迎えた今、来し方を振り返り、新しい時代の要求に向けて我々が果たすべき役割をしっかりと見定め、高い課題設定・解決能力を持ちグローバルに活躍できる創造力豊かな実践的技術者育成にこれまで以上に努力をし、国民の皆様方の付託に応えて行く所存です。高専に対する国民の皆様方の一層のご理解とご支援をお願いする次第です。



公立高専、 新たなステージに向けて

全国公立高等専門学校協会
会長 荒金 善裕

高等専門学校制度が創設されて50周年を迎えましたこと、心よりお慶び申し上げます。

また、創設以来永くご指導を賜っております文部科学省高等教育局、ならびに全国の高等専門学校の教職員各位および関係団体各位のご努力とご助力に心より感謝申し上げます。

高等専門学校はこれまで「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする」という教育理念のもと、5年間の一貫教育を通じた中堅技術者の養成という当初の目的を十分に達成してきました。そこから輩出された卒業生は、産業界の要所に配置されて、技術の中核を担い、技術立国の声価を高めることに大きく貢献しています。

公立高専もその中であって、各校の特色を生かしながら、地域における産業人材の育成と、地域産業の振興に寄与するために、教育研究活動を積極的に進めてまいりました。

そして21世紀となり、中央教育審議会から、平成17年に出された答申「わが国の高等教育の将来像」において、高等専門学校は「早期からの体験重視型の専門教育等の特色を一層明確にしつつ、今後とも応用力に富んだ実践的・創造的技術者等を養成する教育機関として重要な役割を果たすことが期待される。」という、「ものづくり教育」を新たなステージへと押し上げる提案が成されました。

事実、近年は普通科志向の高まりと理科離れが進み、ものづくり教育を取り巻く環境は激変しています。また、国際競争の激化や、産業技術の急速な高度化・複合化により、より高度な専門知識と技術・技能を兼ね備えた創造的な実践的技術者の登場が求められています。特に産業界のものづくりはグローバル化が進み、企画・研究・設計・開発・調達・生産・物流と言った‘ものづくり’のプロセスが、世界の最適な場所に設置されるようになり、技術も猛烈なスピードで進化を遂げています。こうした時代背景の中、高等専門学校には、タイムリーに環境の変化を教育システムに反映していく努力、すなわち内部的な「質」保証システムの確立と、国際社会を舞台に活躍できる人材の供給、つまりグローバルな人材の育成が求められています。

また平成19年には、学校教育法等の改正によって、公立高専の設置者として、従来の各地域の教育委員会だけでなく、公立大学法人が加えられ、公立高専の将来にとっての大きな転機となりました。この改正によって、公立高専は、設置者の判断で、各校の特色に応じた運営が可能となり、自由度が増すと共に活動の幅を広げられるようになりました。一方では以前にも増して高等教育機関としての責務を果たさなければならないという、重い課題を担うことにもなりました。

こうした状況の下で、公立高専は、大都市に設置された高専として、その特色を生かしながら世の中および産業界のニーズに応じていくとともに、我が国のものづくり教育のさきがけとなり、21世紀のものづくりを代表する学校を目指していきたいと考えています。



私立高専、 これからの50年に向けて

日本私立高等専門学校協会
会長 神野 稔

昭和36年、高度経済成長期に「中堅技術者」が著しく不足しているという産業界からの要請により、5年一貫の「高専制度」が制定され、昭和37年に全国に国公立の高専が設置されました。

「熊野高等専門学校」（現「近畿大学工業高等専門学校」）は、当時、国務大臣で科学技術庁長官・経済企画庁長官に就いていた世耕弘一近畿大学初代総長・理事長が「制度制定」に関わり、昭和37年近畿大学の併設校として設立しました。また同年、「金沢工業高等専門学校」が、翌38年には「育英高等専門学校」（現「サレジオ工業高等専門学校」）が開設され、以来、それぞれの私立高専が、「人に愛され、信頼され、尊敬される新時代を担う技術者を育成する」（近大高専）、「21世紀を担う、心豊かで、創造性にあふれたエンジニアの育成」（金沢高専）、「技術を通じてひとりでも多くの人の幸福を願い、社会に貢献する心豊かな人間の育成」（サレジオ高専）との教育目標を掲げ、建学の精神を具現化し、ユニークな教育活動を実践して参りました。

この50年間、高度経済成長、安定成長期、バブル景気、失われた20年と呼ばれる時期を経て今日に至っていますが、その移り変わりの中にあっても、日本経済を支えてきたのはものづくり技術であり、ものづくり工学教育の充実・拡充に努めた高専こそが技術立国日本を下支えしてきたと言ってよいでしょう。平成19年度の中央教育審議会において、財政改革の視点から高専の存続問題が取り上げられましたが、高専卒業生が日本の工業技術の発展に貢献していると高く評価されています。

一方、労働人口の減少による外国人労働者の受け入れ、円高に伴う海外投資の増大による産業の空洞化、中国韓国をはじめとするアジア諸国の経済的発展、これらの要因により日本が新たな産業構造に転換することが求められており、高専制度も改革の時を迎えています。高度化する専門知識・技術教育に適応する「実学教育」と、クラブ活動・寮生活を通じて優れた人間性を身につけさせる「人格教育」の更なる徹底が要請される時代となってきました。

先頃発表された政府の国家戦略会議における教育改革の提言案では、大学の統廃合と私学助成配分の見直しと共に、成長産業の人材を育てるため高専の増設が挙げられています。高専に対する社会からの需要はますます高まっています。国際社会で通用する技術者を育成するため、これからも知徳体の三位一体の教育を堅持し、高専制度の次の50年を築いて行く所存です。



心身のバランスのとれた 新しい人づくりの継承と発展 に向けて

一般社団法人 全国高等専門学校連合会

会長 赤坂 裕

高等専門学校（高専）は産業界の強い要請を受けて昭和 37 年に設立され、平成 24 年に 50 周年を迎えます。中学校卒業生を受け入れて、入学後の早い段階から専門教育を実施し、実験・実習・演習を重視する実践型の高専教育は、社会の高い評価を受け、卒業生の就職率は経済情勢の変動に係らずほぼ 100%を維持してきました。平成 3 年には本科 5 年を修了した学生を受け入れる 2 年間の専攻科が設置され、学生は学士の学位取得ができるようになりました。高専の発足当初の教育目標は「中堅技術者」の養成でしたが、平成 20 年度の中教審答申は高専に「幅広い場で活躍する多様な実践的・創造的技術者」の養成を求めています。高専がこのように発展を続けてきたのは、これまで高専教育に携わってこられた皆様方、そして高専を応援し支援して下さった皆様方のご尽力によります。偶々 50 周年に当って高専に籍を置く者の一人として深く感謝申し上げます。

さて、高専教育の特長の一つに、一貫してクラブ活動を重視してきたことが挙げられます。これは、江戸時代に諸藩主が藩校に武道館を併設し、文武両道の人材育成を行った歴史に通じます。戦後日本は奇跡的ともいえる経済発展を成し遂げましたが、その反面少子化が進行し、青少年のひ弱さが指摘されています。クラブ活動や学寮での集団生活は高専教育の一環であり、その経験を通じて心身のバランスのとれた新しい人材が育っています。

高専は昭和 37 年の発足直後から各地区での高専体育大会を開催していましたが、全国高専体育大会は高専数が増えてきた昭和 41 年に始まり、平成 24 年度に第 47 回を迎えます。一方、文化系の全国大会としては、現在、ロボコン、プロコン、デザコン、プレコンの 4 つの大会が開催されています。これらは、当初、幾つかの高専の教員が相談して始め、次第に全国に広まっていきました。発足年は異なっていますが、学生の主体性や実践性を高めたいという教員による創意工夫から始まった点は同じです。

全国高等専門学校連合会は、その前身である社団法人全国高等専門学校体育協会（専体協）と任意団体の高等専門学校連合会を統合し、一般社団法人として平成 24 年 4 月 1 日に発足しました。国立、公立、私立高専の連合組織であり、全国高専の体育大会やコンテスト等を実施することが主たる目的です。クラブ活動の維持発展をサポートし、高専という同じ土俵で学ぶ学生達が、クラブ活動に意欲的に参加する環境を提供していきます。

産業界はこれからも創造性・主体性・実践性の高い人材を必要とします。加えて、グローバル化に対応できる人材を求めます。人材育成の鍵を握るのは日常的な教育の現場を担当する教員であり、有能な教員の育成と確保、及びその資質の向上も重要です。

今後とも、高専における「人づくり」への皆様方のご協力・ご支援をお願い致します。

高等専門学校制度
創設50周年に寄せて

高等専門学校制度創設 50 周年に寄せて

文部科学大臣 田中 眞紀子

高等専門学校制度が創設 50 周年を迎えましたことに、心よりお祝いを申し上げます。

高等専門学校は、昭和 36 年の制度創設以降、長きに亘って多くの優秀な人材を社会に送り出し、我が国の産業界の発展に貢献され、地域社会の拠点としても重要な役割を果たされるなど、各方面から高い評価を得てこられました。また国内だけでなく海外からも、制度のユニークさと教育成果の点などで、日本の製造業のニーズに良く応えていると高く評価されております。これらの輝かしい実績は、高等専門学校を日々支えてこられた校長先生、教職員の皆様をはじめとする関係者の教育に対する御熱意と、ひとかたならぬ御努力の賜物であり、深く敬意を表する次第であります。

この 50 年の間、高等専門学校は社会経済環境の急速な変化に対応するため、様々な取組を進めてこられました。より高度な専門知識や創造性を有する技術者を養成するため、学校間の連携・協力等により、絶えず教育方法・内容の充実に取り組み、また社会や学生のニーズの多様化に的確に対応するため、地域産業界・教育研究機関等との緊密な連携を図られました。さらに、近年では産業構造の変化や、急速なグローバル化に対応するため、積極的に海外教育機関との交流を図るとともに、教育組織の高度化再編・整備を進めておられます。全国の高等専門学校において、こうした高等専門学校教育の充実に向けた取組が、活発に展開されておりますことは誠に心強く、また、喜ばしいことです。

高等専門学校は、これまで時代と社会の進展に対応して発展され、50 年の歴史を経た今日においても、社会からの期待と要請はますます高まっております。こうした高等専門学校への高い

評価は、これまで社会のニーズに応じて実践的・創造的技術者を育成してきた高等専門学校の実績の表れであり、文部科学省としても、高等専門学校の更なる発展のために必要な支援に努めてまいりたいと考えています。また、関係の皆様には今後とも、高等専門学校のため一層の御尽力をお願いする次第であります。

最後に、高等専門学校が制度創設 50 周年を契機に、今後ますますその真価を発揮し、各界の期待に応え、更なる発展を遂げられますよう期待いたしまして、私からのお祝いの言葉といたします。

高等専門学校 50 年の歩みへの寄稿

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

機構長 野上 智行

高等専門学校が実践的・創造的技術者の育成を目指して昭和 37 年に創設され、以後不断の努力を重ねられ、50 年の輝かしい歴史を刻まれてこられたこと、とりわけ、全国の高等専門学校が多くの有為の人材を輩出され、内外より高い評価を受けておられることに対して衷心より敬意を表します。

当大学評価・学位授与機構の学位授与事業は、大学以外で学位を授与する唯一の機関として、平成 3 年 7 月に当機構の前身である学位授与機構が設立されて以来、20 年以上も続く長い歴史を持っております。そして、機構発足の翌年、平成 4 年度には高等専門学校専攻科制度が発足しております。高等専門学校専攻科を修了され、当機構において学士の学位を取得された方々は、当初の 44 名に始まり年々増加し平成 23 年度には 1,729 名に達しており、これまでに、総計 16,466 名もの多くの方々に学位の授与を行うことができました。高等専門学校専攻科を修了された方々が我が国の産業界を担うかけがえのない重要な人材として活躍されていることに対して改めて敬意を表しますとともに、当機構が学位授与事業を通じて我が国の産業界を支える人材養成に今後も貢献してまいりたいと存じます。

また、当機構は、大学等の透明性の高い客観的な評価や評価の有効性等の調査研究を推進するための第三者機関として、平成 12 年 4 月に大学評価・学位授与機構へと改組され、平成 16 年度に発足した認証評価制度に基づき文部科学大臣から認証された評価機関として、評価事業を実施しております。平成 17 年 7 月には、高等専門学校の評価を行う機関として文部科学大臣から認証され、これまでに申請いただいた延べ 66

高等専門学校に対し、教育の質の保証や、教育研究活動の改善、社会への説明責任と理解促進を目的として評価を実施いたしました。昭和 37 年の設立以来、50 年の歴史の中で、有為な人材を輩出され、多くの研究業績を積み上げてこられた高等専門学校の教育研究活動の更なる向上のため、当機構としましても、認証評価を通じて今後も貢献してまいりたいと存じます。

高等専門学校は、その設立当初においては、我が国の戦後経済を支える技術人材を育成するために大きな期待が寄せられ、また、近年ではグローバル化の急速な進展と社会や産業構造の変化や地域産業ニーズの高度化から、時代にふさわしい創造性のある実践的技術者を養成する高等専門学校への期待は日々増しているところです。高等専門学校が、我が国並びに世界に向けて、将来にわたり、ますます有為の人材を輩出されることを確信し、お祝いの言葉とさせていただきます。

技術者教育認定の重要性と高等専門学校の役割

一般社団法人 日本技術者教育認定機構

会長 木村 孟

高等専門学校制度創設 50 周年おめでとうございます。

日本が高度成長期に入ろうとする頃、高等専門学校制度が発足し、以来多くの優秀な卒業生が日本の産業、特に製造業の発展を支えてきました。技術者教育の面で、高等専門学校の先生方が日本の産業界に果たされた貢献には計り知れないものがあります。また、日本の学生だけでなく、アジアの途上国の学生の教育にも熱心に取り組んで頂いております。

日本技術者教育認定機構 (JABEE) は 2001 年度に認定を開始致しましたが、翌年度には 3 つの高等専門学校の本科 2 年、専攻科 2 年の学士課程相当レベルのプログラムが JABEE の認定を受けました。その後、順調に数を伸ばし、2011 年度の実績では、国立高等専門学校 51 校のうち 4 つの商船高等専門学校を除いた 47 校における 76 教育プログラムが JABEE の認定を受けています。大学を含めた 2011 年度までの学士課程の認定は累計で 171 教育機関、450 プログラムですから、高等専門学校は JABEE 認定に極めて積極的であると申し上げてよいかと思えます。

日本の大学における技術者教育が工学理論の習得に重点を置き過ぎていると言われる中で、高等専門学校の教育プログラムは本来の技術者を育成する教育を行っており、産業界から高く評価されています。2003 年から 2008 年にかけて OECD が実施した日本の高等教育に関する調査に基づいたレポート (2009) では、高等専門学校の技術者教育レベルの高さと産業界、特に製造業への貢献が極めて高く評価されました。

JABEE が加盟している技術者教育認定団体の集まりであるワシントン協定が構成メンバー

となっている IEA (International Engineering Alliance) は、「エンジニア」を複合的な課題に取りくむ技術者であると定義しています。複合的な課題とは、複数の解が存在しうる課題、或いは解がないかもしれない課題のことです。エンジニアは、社会のあらゆる制約のもとで、複数の解の中から最善のものを提案することが求められます。そのために、エンジニアには専門技術のみならず、歴史、文化の素養も必要とされます。数学を始め基礎自然科学の知識が必要なことは言うまでもありません。社会がエンジニアに要求する役割は時代とともに変化していきます。JABEE は教育認定という手段を使ってその変化に対応した技術者教育の振興を目指しており、今後とも、高等専門学校の貢献が不可欠であることは言うまでもありません。

グローバル化の時代を迎え、技術者教育の国際的同等性の確保が重要となっています。例えば、アジアからの留学生は、母国に帰国あるいは他国に移住してエンジニアとしての職業に就く場合に、日本での留学期間中に認定プログラムによって技術者教育を受けたか否かを問われるケースが増加してきています。アジアの国々では、香港、日本、シンガポール、韓国、台湾、マレーシアがワシントン協定に加盟しています。インド、スリランカ、パキスタン、バングラデッシュが暫定加盟をしており、中国、タイ、フィリピン、インドネシアが暫定加盟に向けて準備中です。

日本の多くの若人たちが、国境を越えて働く時代が来ています。国際的に通用する技術者の育成を目指して、互いに協力しつつ頑張っていくではありませんか。

高等専門学校創設 100 周年に向けて！

国立大学法人 長岡技術科学大学

学長 新原 皓一

高等専門学校創設 50 周年を心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。

高等専門学校（高専）制度は、我が国の高度経済成長を背景とする産業界の強い要請を受け、特に工業に関する理論的な基礎の上に実践的な技術を身につけた、長期に第一線で活躍する技術者を養成するため、昭和 36 年に創設されました。高専は中学校卒業者に 5 年間の一貫教育をおこなう高等教育機関であり、戦後の 6-3-3-4 制の単線型教育体系を基本としてきた教育制度の中で、能力・適性に応じて早期の専門高等教育を志向するユニークな学校類型として今まで重要な役割を果たしてきました。景気動向に影響されやすい大学の就職率と比べ、高専の就職率が常に 100% 近い就職率を維持してきた事実は、この高度な教育制度が産業界から高く評価されていることの証左といえます。

本学は技術系人材養成の一翼を担う高専卒業者の進路上の隘路を切り開く大学院に重点を置いた高等教育機関として 36 年前に創設され、本学学生の 8 割は創設以降一貫して全国の高専から受け入れてきました。高専から最初の卒業生が巣立った当時は非常に狭き門であった大学編入の枠は、時代の変遷とともに拡大しましたが、現在も高専卒業後、大学 3 年次に編入する者の 3 割程度が本学と豊橋技術科学大学に入学しています。高専との連携は卒業生の受け入れ以外にも、連携教育プログラムの実施や多岐にわたる共同研究の実施、教員の人事交流、図書館連携などを幅広く積極的に行っています。本学と高専は成り立ちから今日まで強い連携を維持しながら共に歩み、これからも本学は高専と共にあります。

我が国は科学技術創造立国を標榜し、幾多の

技術革新に取り組んで世界経済の中で高い地位を築いてきました。これまでの 50 年を振り返ると、高専が育てて世に送り出した有為な人材は狙いどおり、我が国の科学技術を支え、技術革新に関与し続けており、高専制度創設の趣旨は十分達成され続けたといえます。しかし、我が国を取り巻く環境は 50 年前と比べ大きく変化しました。経済活動の急速なグローバル化により、産業活動の国際競争が激化し、製造拠点の海外移転が加速しています。また、国力を反映しない円高の進行や急速な少子高齢化の進行などの重い課題ものしかかっています。一方、世界を見ると、人口が爆発的に増加して食糧・エネルギー・環境の問題が顕在化し、我が国への影響も計り知れません

様々な課題があるにせよ、我が国がこれからも豊かで持続的に発展する平和な国であるためには、一定以上の経済成長は必要不可欠であり、その際、我が国に必要とされるものは 50 年前と今も変わらず科学技術の振興であることは言うまでもありません。科学技術創造立国をけん引する実践的で創造的な技術者を養成する質の高い教育機関として、高専の役割は今まで以上に重要となっており、また期待されています。来る高専制度創設 100 周年の際に、高専が輩出した技術者たちの紡ぐイノベーションが我が国に明るい未来をもたらした、そう評されることを願ってやみません。新しい風を呼び起こす世界に類を見ない魅力ある学校群としてますます発展されますことを心より祈念します。本学も高専とともに、教育研究体制の更なる充実に取り組み、我が国の技術革新と国際競争力の向上に貢献して参ります。

高等専門学校開設50周年にあたって

国立大学法人 豊橋技術科学大学

学長 榊 佳之

高等専門学校（高専）がこの度、開設 50 周年を迎えられますこと、心よりお慶び申し上げます。50 年前と言えば日本が東京オリンピック（1964）の開催へ向けて国を挙げて取り組んでいた時代、高専も日本の未来へ向けての大きな期待を背負ってのスタートであったことと思います。以来、「日本列島改造論」などで日本全体が大きく発展した 1970 年代、「Japan as No1」と言われた 1980 年代、そして「失われた X X 年」、そして 3.11 の東日本大震災など、まさに激動の 50 年でありました。この間、全国各地に多くの高専が設立され、高専卒業生を更に高度な人材に養成する技術科学大学が豊橋と長岡に設立され、更に行政改革の中で独立行政法人組織となるなど、高専は社会の期待に応えながら大きく進化、発展してこられました。私は豊橋技術科学大学の学長に就任してから北は仙台から南は沖縄まで 10 余りの高専を訪問させていただきましたが、どこも地域社会で確固たる地位を築かれ、大きな存在感を示されていることに強く印象付けられました。このように社会からの信頼を築き、ここまで大きく発展された高専の姿は、高専関係者はもとより多くの方々の熱意とご尽力の結実であり、関係者の皆様に心よりのお祝いを申し上げます。

私共、技術科学大学にとりましても単に優れた高専卒業生を受け入れ教育するだけでなく、卒業生のかかりの方々が高専の教員として後輩の指導にあたっていること、高専・技科大の連携した技術者養成教育プログラムの実施、教員の人事交流や共同研究の実施などを通して高専の発展に目に見える役割を果たしてきたものと自負しております。高専の 50 周年は私共にとりましても大きな喜びと誇りを感じるところであります。

さて、記念すべき 50 周年はこれまでの 50 年を振り返ると共にこれからの 50 年を見据える機会でもあります。近年はインターネットなどの情報通信革命によるグローバル化の著しい進展などにより社会構造が大きく変化する中、エネルギー・環境問題が最大の課題となり、また社会の成熟に伴う医療・健康問題、人口増加に伴う食糧問題など様々な問題が顕在化しております。そして、これらの困難を乗り越えるには科学技術の力が不可欠となっておりますが、そこでは実践的、創造的、挑戦的な技術者・科学者を養成し産業界、学界に輩出してきた高専・技科大の果たすべき役割は今まで以上に大きいものがあると思います。これまでも高専と技科大は時代の動きを的確にとらえつつ連携して進んでまいりましたが、この 50 周年を節目として、次に時代を担う使命感を持ち、グローバル社会を視野に入れた実践行動力と創造性を備えた技術科学者を育てるため両者の連携・協働を一段と強化したいと思っております。

50 周年と言う記念すべき節目にあたり、高等専門学校が次の 50 年に向けて更なる進化、発展を遂げられることを祈念し、お祝いの言葉いたします。

高等専門学校の今後の更なる発展に期待する

一般社団法人 日本経済団体連合会
会長 米倉 弘昌

高等専門学校制度創設 50 周年を心よりお慶び申し上げます。

高専は、創設以来、実社会に密着した実践的な教育を行なうことにより優秀な技術者を社会に多数輩出され、わが国の産業の発展を支えてこられました。

教職員をはじめとする高専関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表しますとともに、産業界といたしまして改めて心より感謝申し上げます。

わが国経済は、オイルショック以来と言われた東日本大震災後の急激な落ち込みから抜け出し、現在、緩やかに回復を続けております。しかしながら、行き過ぎた円高、再燃する欧州の債務問題、新興国経済の減速など、日本を取り巻く経済環境は依然として厳しく、先行きは予断を許さない状況にあります。

こうした中、わが国が再び力強い持続的な経済成長を実現していくために重要な鍵となるのは「イノベーション」であります。日本企業は、これまでも省エネや環境問題といった社会が抱える課題に正面から取り組み、飽くなき改善と創意・工夫、そして革新的な技術の開発によって次々に新しい解決策を提示し、それを成長につなげてまいりました。経団連では、こうした「課題解決型のイノベーション」の推進を、日本の産業競争力の強化と経済の再生に向けた取り組みの根幹に据えるべきであると考えております。

日本のイノベーションを支える、優秀な技能と豊富な知識、そして高い問題意識を持った技術者として、高専卒業生に対する期待は今後ますます高まっていくものと存じます。産業界といたしましては、「ものづくり」教育の推進、海外インター

ンシップ制度の充実によるグローバル化への対応といった高専の取り組みを大いに歓迎いたしますとともに、引き続き、高専からのインターン生の長期受入れ、現役・退職技術者によるキャリア教育支援、高専卒業生の採用等を通じ、高専の活動に協力させていただく所存であります。

最後に、高専の更なる発展を心より祈念いたしまして、私からの祝辞とさせていただきます。

技術立国と人材立国を支える高専に期待

公益社団法人 経済同友会
代表幹事 長谷川 閑史

我が国は、グローバル化や少子高齢化など国内外の環境変化への対応という様々な課題に直面しています。昨年発生した東日本大震災からの復興も含めて、日本再生のためには安定的な経済成長を実現することが求められています。そのためには、短期・中長期を問わず、国を挙げて成長戦略に全力で取り組む以外に道はありません。

今、改めて日本の特長を考えてみると、今日の繁栄の基礎となったのは技術と人材であり、これが両輪となって機能してきたことにより、経済社会の発展に大きく貢献してきたと言えるでしょう。この2つは今後とも維持・強化していかなければなりません。

半世紀前、高度経済成長を支える優秀な人材の育成を目指して創設された高等専門学校は、現在でも卒業生の就職率がほぼ 100%に達するなど、産業界から大きく期待されています。特に、高専卒業生に対して、企業の第一線の現場からの採用ニーズが多く寄せられるのは、その実質的な技術と技能の価値が高く評価されているからであると考えます。

このような伝統を大切にすると同時に、新興国等との競争が一層激化するグローバルな時代に対応し

て、高専も自ら革新していくことが求められます。こうした状況下で、留学生交流の推進や高度化再編による新しいモデル高専の設置などに加え、高専制度創設 50 周年にあたり『進化する高専』を標榜されていることは大変時宜を得たものであります。経済社会の変化を常に意識し、学生や教職員の皆さんが進化し続けることで、高専が「技術立国」と「人材立国」の最前線を支えていくことに期待いたします。

高等専門学校制度 創設 50 周年に寄せて

日本商工会議所
会頭 岡村 正

高等専門学校制度創設 50 周年を心からお祝い申し上げます。

高等専門学校は、産業界の要請に応え、実践的、創造的教育を通じて、実社会で活躍できる技術者を養成する高等教育機関として、さまざまな技術系分野に優れた人材を輩出し、高い評価を得てられました。関係者の皆様の永きにわたるご努力に対し、心から敬意を表します。

さて、さまざまな試練に直面しているわが国が復興・再生するには、経済を再び成長軌道に乗せることが不可欠であります。そのためには、企業活動等の働く場において人々が、自信と喜びを持って“光る”ことが何より重要です。高等専門学校が進めておられる人材教育によって、実社会で働く一人ひとりが創造性と実践性を発揮することは、私が、日本商工会議所会頭に就任以来、その重要性を訴え続けてきた「個が光るイノベーション」に他なりません。

私ども商工会議所では、そうした産業人材の育成を補完するため、検定試験や研修等の事業に取り組んでおります。若手技術者への技術の伝承や、伝統的な産業におけるインターンシップ事業等を行い、地域における人づくりに貢献して

いる商工会議所も少なくありません。

高等専門学校におかれましては、半世紀にわたり積み重ねてこられた実績を礎とし、さらに「進化する高専」の理念のもと、今後とも、日本が世界に冠たる科学技術立国となるべく質の高い技術者の育成に取り組まれることを強くご期待申し上げて、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

これからの高等専門学校に期待すること

全国中小企業団体中央会
会長 鶴田 欣也

このたびは、高等専門学校制度が、創設 50 周年という記念すべき節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

高等専門学校は、実践的・創造的技術者を養成することを目的に創設され、これまで数多くの優れた人材を産業界に輩出され、社会的に大きな役割を果たしてきております。

ものづくり分野では、中小企業への新技術、新製品開発等において、ご指導、ご支援を賜り、わが国の産業基盤の強化にご尽力されていることに対しまして、厚く敬意を表する次第であります。

近年、教育機関におけるキャリア教育・職業教育の強化が叫ばれております。

このような中、高等専門学校は企業における中核的人材となり得る若者を実践的に養成する教育機関としてその役割を果たしておりますが、高等専門学校が地域中小企業と連携し、中小企業の魅力を伝え、中小企業の人材育成面において、高等専門学校及び教員の皆様のご尽力下さいますことを願っております。

わが国産業の発展に貢献する人材を育成するため、教育内容のより一層の充実を図り、今後とも高等専門学校がご活躍されますことを期待しております。

今後の高等専門学校 への期待

一般社団法人 日本船主協会
会長 芦田 昭充

この度、高等専門学校が創立 50 周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

高等専門学校は、「創造性のある実践的技術者の育成」という創立以来の目標の下、これまで優秀な人材を産業界に輩出されており、商船学科からは、日本海運業界を支える海上職を担う有望な人材を数多く送り出していただいております。

海運業界において、海上職員は、安全且つ環境負荷に配慮した海上輸送という海運会社の至上命題を第一線で担う役割を果たしており、また、常に国内・国外で激しい競争に晒されている海運会社にとって、優秀な海上職員は企業価値を高める財産であります。一方、国内物流を支える内航海運においては、中長期的な海上職員の不足が危惧されるどころ、若手職員の確保・育成が喫緊の課題となっております。

時代の変遷や業界事情の変化によって、海運会社が新規海上職員に求める資質、即ち、高等専門学校をはじめとする商船系学校に求める教育ニーズも変容してきており、外航海運会社からは英語力やコミュニケーション能力を養う教育と、経営学等の一般教養科目内容の拡充等が、内航海運会社からはコミュニケーション能力や、より実務的な専門教育の充実等が期待されております。

海運業界といたしましても、業界の将来を担う人材育成のために、引き続き、高等専門学校の教育にご協力・ご支援をさせていただく所存です。

創立 50 周年という節目を契機とされ、高等専門学校がますますご発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

創設 50 周年をお祝い して

全日本中学校長会
会長 三町 章

このたび高等専門学校制度が創設され 50 周年を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。また、創設 50 周年を記念され、国立高等専門学校機構、全国公立高等専門学校協会、日本私立高等専門学校協会が連携され様々な記念事業を行ない、これまでの歩みやこれからを展望する記念誌を発行されましたことに、重ねてお祝い申し上げます。

高等専門学校は、中学校卒業段階という早期からの 5 年一貫の体験重視の専門教育を特色とし、応用力に富んだ実践的・創造的技術者の育成が行われ、その評価は高いものと受け止めております。このことは半世紀にわたって社会状況や学生の職業・進学意識の変化を受け止めながら、充実した教育活動を取り組まれてきた成果であり、これまでのご努力に対して深く感謝申し上げます。

昨今の経済構造・産業構造の変化に伴う就職環境・就労環境や 4 年制大学をはじめとした高等教育機関への進学者の増加などの影響もあり、進学希望者は必ずしも多いとは言えません。しかし希望する者は技術やものづくりへの関心が高く、今後も将来をおおいに期待できる人材が入学していくものと思います。

50 周年記念の年を新たなスタートとして、各高等専門学校において次代を担う人材の育成のため、教育内容・方法の充実をはじめ、様々なニーズへの対応などにご尽力いただき、ますます発展されることを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

15歳、志学、からの 技術者の一貫教育

高等専門学校連合会 元会長
第16代国専協会長、宮城高専元校長
四ツ柳 隆夫

志学の歳から始まる体験重視型の技術者一貫教育は、質の高い人材を輩出して我が国の復興と高度成長の一翼を担ってきた。

環境、食糧、水など人類の「生存の条件」が次第に現実的問題となる中で、我が国は、世界に先駆けて、資源・エネルギー・国際化・少子高齢化・過疎化等の重層的難題に直面している。我々は今、改めて、次世代の教育から国力を立て直すべき節目を迎えている。

高専は、伝統ある準学士課程を技術者教育のコアとして、グローバルな場で活躍する技術者の生涯教育システムを整備し、新たなニーズに応える体勢を築いてきた。即ち、準学士として直ちに実務に就くコース、専攻科での国際相互承認された学士水準の教育（JABEEは技術者教育を認定）、大学3年への進学による工学教育などを、学生達が各自の志と能力に応じて選択できる体系である。

これからの時代、蓄積された膨大な知識と技術の「組み合わせ」の中から、多様な領域で複合技術のイノベーションを実現する必要がある。「組み合わせ問題」は、理論的には解けない。そのとき、身に付けた知識を、体験重視型の教育を通して知恵として使いこなした経験は、論理では不可能な「着想」を生む揺籃となる。志を持って人類未体験の難問と対峙するとき、この種の揺籃は、技術者の大きな力となる。優れた教師と志をもつ学生とが高専教育の場に集い、我が国に新たな誇りと豊かさとをもたらすことを期待する。

存在理由を確認した 新たな出発

独立行政法人 国立高等専門学校機構
前理事長、特別顧問 林 勇二郎

高専の創設は産業界の強い要請による。本科の5年一貫教育を軸とした多様なキャリアパスは、我が国の学校教育のリニアシステムとは別の複線として、実践的・創造的かつ人間力のある技術者を養成してきた。そして国公立の57高専は全国各地で活動し、それを全体の総合力とすることで、我が国の科学技術を担う基幹的な組織となっている。高専の創設50年は、このような存在理由を確認し、また人類が直面している課題と我が国が置かれている状況を真摯に受け止めた、社会のための高専としての新たな出発である。

高専教育の特色は、基礎科学のうえに築かれた応用科学と技術の知識を体系化した、所謂エンジニアリングサイエンスが、現場での実務・実践により実質化されている点にある。このことが、ユーザー側に立った技術開発ばかりか、次々に生ずる複雑な事象に対して問題解決につながる技術者を養成している。さらに東日本大震災は、科学技術の役割と本来のあるべき姿を考え、自然と社会をつなぐ視点の重要性をメッセージとして託している。

産学連携を基本とする高専は、COOP教育を通して、産学のあり方を接続から協働へと進化させてきた。シーズとニーズの関係やCSRの意識の共有においても先導的な役割が期待される。グローバル化が進む中で、学による人材育成と知の創造は、企業との需給に齟齬を生じながらも広域化が進んでいる。高専にあっては、国際的な連携を積極的に進めるとともに、国の知識基盤社会を再構築し、地域再生につながるイノベーションを引き起こすことが責務となろう。



KOSEN EDUCATION: MALAYSIA'S EXPERIENCE AND EXPECTATION

His Excellency Datuk Shaharuddin Md. Som
Embassy of Malaysia, Tokyo

This year marks the 50th Anniversary of Kosen's establishment and it was 30 years ago that the former Prime Minister Tun Dr. Mahathir Mohamad announced the "Look East Policy". Under this policy, Malaysian students were sent to Japan among others to learn Japanese work ethics, discipline, custom and management style. Several programs were initiated including the Japanese Technical Education Program (JTEP) which the Malaysian Government provides scholarship for excellent students to pursue engineering studies at the various Kosen in Japan. The pioneer batch of 24 JTEP students arrived in Japan in April 1984, early enough to enjoy the beautiful bloom of Sakura for the first time in their lives. Life, however, for this pilot group was not as admirable as Sakura. Everything from food to culture was new and students initially experienced difficulties in their new environment. But thanks to the Japanese hospitality, they gradually began to assimilate and eventually enjoyed their stay in Japan infused with valuable knowledge and experience. This program would not have been successful without the commitment, cooperation and continuous support from both Kosen and the Japanese Government. As a result of tireless efforts from both sides to continuously improvise and improve this program, the modest intake of 24 students a year has risen steadily over the years. Since its inception, more than 1,500 Malaysian have benefited from the JTEP program and currently, there are 200 Malaysian students studying in 41 technical colleges in Japan.

The Kosen way of education has produced quality and skilful engineers and technologists, who have contributed to Malaysia's modernization. Graduates from Kosen are easily accepted by their employers, mainly due to their deep understanding of Japanese work ethics and good practical skills besides their fluency in Japanese language. These qualities were attributed to the Kosen's unique syllabus which, among others, emphasized scientific experiments, workshop training and internship. At the same time, the classroom system in Kosen enables closer supervision for students which in turn encourage student-teacher interactions. Student dormitory service also provides a conducive environment for study and better interaction with other Japanese students.

It is without doubt that Kosen has certainly played an important role in complementing our efforts towards human capital development in Malaysia. It is our fervent hope that the JTEP program continues to be relevant and comprehensive which will contribute towards the enhancement of its international stature particularly in the field of technical education.



CONGRATULATORY MESSAGE

Dr. Kitti Tirasesth

Former President

King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang,

Bangkok, Thailand

On behalf of King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMITL), I would like to extend my sincerely congratulations to Institute of National Colleges of Technology (INCT), Japan, on the truly special occasion of its 50th anniversary celebration. We are especially happy and very pleased that KMITL have such an esteemed relationship in which successful academic programs and activities have prospered before and after the official academic cooperation had signed. All the National Colleges of Technology in Japan are acknowledged as higher research and practical education institutions.

Our faculty members and students, who have been to some of your colleges for research or exchanges, informed me that all of your colleges have a wonderful research environment and educational systems. Moreover, the hospitality from your members was so kind and friendly. We are extremely grateful for the sisterhood relationship established with INCT and would like to continue and develop the relationship with various programs for our mutual benefit in the future.

Over the last half a century, INCT has accomplished great things and his missions in the research and education and is to be commended on its strategy and vision. KMITL is proud to support and be a part of this historic and momentous occasion and looks forward to closer collaboration and cooperation in the future with your institutions.



MESSAGE FOR INCT 50TH ANNIVERSARY

Mr. BOO KHENG HUA

Principal & CEO

Temasek Polytechnic, Singapore

First, let me offer my heartiest congratulations to the Institute of National Colleges of Technology (INCT), Japan on this very significant milestone of its 50th Anniversary .

Temasek Polytechnic is pleased to be in partnership with INCT as we share a common objective of cultivating a global mindset and providing opportunities for global experience for our staff and students. Since 2003 when the partnership started initially with exchanges between TP's School of

Engineering and the Kumamoto National College of Technology, the number and variety of cultural and professional exchange programmes have increased over the years to involve other Schools in TP and INCT member institutions. As a result of our collaboration, more than 80 TP students were sent to Japan for cultural exchange programmes and another 25 students completed their internships at various INCT member institutions. Temasek Polytechnic also welcomed more than 80 Japanese students from INCT with programmes in the areas of culture, technology and English Language.

I would like to extend our special thanks to Mr Kitani Masato and the INCT leadership team for forging and growing this collaboration to cover all INCT member institutions and all the Polytechnics in Singapore. Temasek Polytechnic would like to reiterate our commitment to this partnership and we look forward to growing the breadth and depth of our exchange programmes and joint projects.

Once again, congratulations and best wishes to INCT as we look forward to more significant milestones ahead in our partnership journey!



CONGRATULATORY MESSAGE

Ir. Dr. Lawrence W Chan

Deputy Executive Director and Academic Director (Engineering)

Vocational Training Council, Hong Kong

I would like to convey my warmest congratulations to the Institute of National Colleges of Technology (INCT) on the special occasion of the 50th anniversary.

From the early establishment of twelve National Colleges of Technology (KOSENs) in 1962, the number of KOSENs has grown to fifty one in recent years, and they are now grouped under INCT as a single legal entity. In accordance with its mission “to foster practical and creative engineers”, INCT enjoys a strong reputation from industry and the higher education community, both locally and internationally, for its quality education that nurtures young people to become technically competent engineers serving the manpower needs of the industry.

The Vocational Training Council of Hong Kong has initiated staff and student exchange activities with a number of KOSENs since 2009. Through interactions with their Japanese counterparts, our participants have acquired valuable experiences in terms of gaining international perspectives and widening exposures. In an increasingly globalized economy, it is imperative for academic institutions to strengthen ties with other institutions in an international arena, and we look forward to having stronger and more fruitful collaborations with INCT in the years to come.



MESSAGE OF CONGRATULATIONS

Dr. Lung-Sheng Lee

Former President / Professor

National United University, Miaoli, Taiwan

On behalf of National United University (NUU), I would like to extend my heartiest congratulations to Institute of National Colleges of Technology (INCT), Japan, on its celebration of the 50th anniversary of the National College of Technology (KOSEN) system. My congratulatory message in a concise Chinese phrase is “高專半百・譽滿四海”, pronounced as “*gao zhuan ban bai • yu man si hai*” in mandarin Chinese. It means that KOSENs have a long experience and a superb reputation in preparing practical and creative engineers for industries.

“四海”(si hai) literally means “four seas” and symbolizes “the world” in Chinese. Taiwanese often say that “四海之內皆兄弟”, pronounced as “*si hai zhi nei jie xiong di*” in mandarin Chinese. It means that “all men are brothers”. Japan and Taiwan are two close and friendly brothers. NUU and other four universities in Taiwan are so pleased to have the sisterhood/brotherhood relationship established with INCT and would like to foster the relationship with a variety of programs for our mutual benefits. We look forward to more exchanges and closer cooperation with KOSENs in the future.